OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本都市下層社会の歴史的研究
Author(s)	能川, 泰治
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42212
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏名	能川泰治
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 15739 号
学位授与年月日	平成12年10月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科史学専攻
学位論文名	近代日本都市下層社会の歴史的研究
論文審査委員	（主査） 教授 猪飼 隆明 （副査） 助教授 村田 路人　教授 杉原 達

論文内容の要旨

本論文は、日露戦後の東京・大阪を事例に、都市下層社会の存立構造を究明し、その歴史的位置付けをおこなうことによって、都市下層社会を機軸にすえた社会の全体像を展望しようとしたものである。

本論文は、序章「課題と分析視角」、第一章「日露戦争前後の都市下層社会—大阪市の人力車夫を事例に—」、第二章「日露戦後大阪市における『貧民学校』の設立」、第三章「日露戦時期の都市社会—日比谷焼打事件再考—」、第四章「日露戦後の都市民衆騒擾と社会主義・対外硬」、第五章「『冬の時代』の社会主義と都市下層社会—演歌師・添田唖蟬坊の活動を中心に—」、終章「総括と今後の研究課題」からなり、400字詰め原稿用紙およそ480枚の論文である。

序章においては、まず日露戦後を、日本が帝国主義世界体制に組み込まれるとともに、国内では急激な都市化の進行とデモクラシー状況形成の本格化がみられる、いわば現代社会形成の起点と位置付け、「都市下層社会」の分析をもって、帝国主義やデモクラシーの存在形態にせまる方法たらしめることを提起する。

第一章では、日露戦争前後の大阪の都市化と労働・生活の不安定性の進行の中で、都市下層に、人的結合関係に依拠して騒擾や労働争議をおこなうグループと、都市化を「公益」の発展と評価して、自らの労働の有用性を「公益」の中に位置付け、その代償として「国民」としての人格承認を求めようとする—それは公権力の介入によって、容易にナショナリズムに転化する—グループとに分かれることを明らかにした。

第二章では、スラムに住む不就学児童のための夜間小学校＝貧民学校について、その設立の背景と政策的意図を分析している。学区の閉鎖性のゆえに公教育から排除された都市下層の児童を、救済せんとする慈善事業として、警察の介入のもと設立されたのが貧民学校であると指摘する。

第三章、第四章では、日露戦後の1905年9月に東京市で起こった日比谷焼打事件を都市民衆騒擾として、具体的には、戦時下の東京市における出征軍人家族援護事業に内包された生業扶助・制限扶助主義をめぐる都市下層と「有志者」中下層・警察との緊張関係、あるいは「国民」形成の場としての「祝捷会」が、都市下層を排除しておこなわれようとしたことにみられる矛盾の表れとして分析した。さらに、そこにみられた民衆のエネルギーを対外硬派や社会主義者がどのように組織しようとしたかを、1906年の東京市電値上げ反対運動を素材に分析している。

第五章では、明治・大正期に活躍した演歌師・添田唖蟬坊の活動とその作品を素材に、都市下層社会と大正デモクラシー状況との関係を分析している。社会主義運動にとっての、「歌」のもつ意味、添田が、その「歌」にかかわりつつ、都市下層社会に身を置き、借家人の相互扶助的な生活共同組織をつくって、地主・家主との間で借家争議を展

開し、それを通じて居住生活の安定・向上を権利として自覚させようとしたこと、いっぽう演歌を通じてナショナリズムの再生産に加担する役割をも果たしたことを具体的に指摘する。

終章においては、都市下層社会の研究は、そのままでは都市史研究にはならないことを自戒したうえで、これまでの都市史研究において注目されてきた官僚行政・地域秩序と都市下層社会との関係、帝国支配の拠点としての都市と下層社会との関係、帝国主義とデモクラシーとの内在的関連において、民衆騒擾や大衆文化を位置付ける必要があると、今後の課題を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

都市史研究は、現在多くの近現代史研究者の注目を集めている。都市を構成する部分社会にメスを入れることで、国家と民衆、あるいは労働争議・労働運動といった研究の枠組みでは把握されにくかった具体的生活像に光が当てられることになった。その意味での貴重な成果が、近年次第に蓄積されつつあると言える。本論文は、そうした研究が、部分社会の分析をもってこと足れりとしている現状を批判して、部分社会の分析を時代相のトータルな把握につなげる必要があると主張し、都市下層社会の分析は、日露戦争前後の、帝国主義への突入と一方での大正デモクラシー状況への序曲の時代の全体像把握にとって有効であるとして、大阪の人力車夫社会や「貧民学校」、あるいは東京の下層社会に着目した。この、研究者としての、視点の確かさは大いに評価できるし、「都市下層社会」の動向における、国家や戦争に取り込まれかねない“危うさ”とでもいえる性格への着目も、この論文の大きな成果であると考えられる。

しかし、問題点がないわけではない。とくに個々の史料分析の甘さは、急ぎ克服すべき課題であろう。あるいは、「下層」という概念のあいまいさも問題である。

とはいえ、本論文の研究史上における貢献は、以上の弱点にもかかわらず貴重であり、かつ第五章の添田唖蟬坊の研究には、研究の新たな方向への展開への可能性も示唆されている。

よって、本論文は博士（文学）の学位に相応しいものと認定する。